様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：３２６４４
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２５９２６２１

研究課題名（和文）外国人看護師の介護老人保健施設でのディスコミュニケーションに関する研究

研究課題名（英文）Study on the discommunication in a foreign nurse's nursing and health care facilities for the aged

研究代表者
江本　厚子（EMOTO, Atsuko）

東海大学・健康科学部・准教授

研究者番号：７０２９００５４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,500,000円、（間接経費）　1,050,000円

研究成果の概要（和文）：老人施設で働きながら介護士資格を取得した外国人女性1名と施設管理者、日本人スタッフに面接調査を行った。その結果外国人介護士は、入所高齢者の話をゆっくり傾聴していた。日本人スタッフは外国人の努力を認めていた。管理者は地元メディアに彼女のことを紹介して、入居者以外にも地元住民にも周知を図っていた。記録を書くことよりも話す能力向上を重視して指導していた。今後看護師資格取得のために、より多くの語彙や専門用語をマスターするための資源を求めていた。

研究成果の概要（英文）：We interviewed the foreign woman who acquired care worker qualification of Japan, the facility management person, and the Japanese staff. Our purpose is to clarify the following things. How has the foreign care worker taken communication with elderly people? What is being troubled when the Japanese staff takes communication with a foreign care worker? What kind of consideration is the facility management person carrying out to the foreign care worker? As a result, the foreign care worker was listening to elderly people's talk attentively slowly. The Japanese staff thought that one also needed to be tried hard. The facility management person was introducing the foreign care worker's thing to local media. Although the foreigner was attaching greater importance than to writing capability weak to training of conversation capability. The foreigner was asking for the resources which memorize many technical terms and vocabularies for nursing license acquisition.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学

キーワード：外国人看護師資格受験候補生　ディスコミュニケーション　異文化看護　高齢者ケア　高齢者施設ケア

１．研究開始当初の背景
日本政府が、対外経済関係の発展と経済的利益の確保に寄与するという理由から、フィリピン、インドネシアなどと経済連携協定を批准している。その結果、外国人看護師、介護士の受け入れが開始された。すでに、日本での看護師、介護士資格取得を目指して、医療・介護現場で働いている。彼らは自国で、看護師や介護士の資格を取得した人々なので、基本的な看護技術・介護技術は習得している。しかし、看護・介護を行うためには、対象者やチームスタッフとの円滑なコミュニケーションが重要である。高齢者にとっては、コミュニケーションがうまくとれない外国人にケアされることに抵抗を感じることが報告されている。また、日本人スタッフとのコミュニケーションも円滑にいかなければ、質の高いケアを提供することができず、外国人看護師にとって資格取得までの研修段階で挫折感を味わうことになる。彼らが勤務している場所は日本の各地に分散しているため、方言の問題も含めて、日本語の語彙の多様性、日本およびその地域の文化的背景を理解しながらコミュニケーションをとらなければならないという非常に難度の高い能力が要求される。逆に、外国人看護師を受け入れる施設側としても、彼らの文化的・宗教的背景を理解し、勤務体系に配慮すること以外に、自分たちの看護ケア場面での適切なコミュニケーションのあり様を具体的に提示し、彼らに教育していく必要がある。外国人看護師と患者、日本人スタッフとのコミュニケーションの実際を明らかにし、相互行為の中からどのようなコミュニケーションの方法がとられているかを分析することによって、今後来日する外国人看護師への教育プログラムを作成し、実用化することは有用であると考える。

２．研究の目的
日本の高齢者ケア施設で働きながら、日本の看護師資格取得をめざす外国人（以下、外国人看護師資格受験候補生）が、患者への質の高い看護の提供と、日本人スタッフとの円滑な協働を行えるための教育プログラムの開発をするために、以下の調査を行う。

(1)高齢者ケアの現場で勤務する外国看護師資格受験候補生のケア場面での患者とのコミュニケーションの実際を明らかにし、彼らの直面するディスコミュニケーションや、その背景にある日本人高齢者という異文化看護理解について明らかにする。

(2)日本人スタッフとのケア場面でのコミュニケーションの実際を明らかにし、外国人看護師資格受験候補生と協働することに対する困難や喜び、異文化交流に対する自己概念の変化を明らかにする。

(3)上記目的(1)・(2)の結果および、国内外の医療施設での円滑な異文化看護の参考となる文献や施設の視察調査から、具体的な教育プログラムを作成する。

(4)作成した教育プログラムに基づき、実施、評価する。

３．研究の方法
すでに来日して、医療・介護の現場で働いている外国人看護師資格受験候補生の高齢者ケアの場面でのコミュニケーションを、縦断的に調査し、コミュニケーションの様相の変化を明らかにする。並行してインタビューを行い、彼らが感じる日本人高齢者とのディスコミュニケーションと異文化看護について明らかにする。さらに、日本人看護師、介護士、管理者とのコミュニケーション場面の調査を行い、外国人看護師資格受験候補生とのディスコミュニケーションと異文化看護について明らかにする。これらの結果と文献等から教育プログラムを作成、実施・評価する。

４．研究成果
(1)予備調査
中部地方の地方都市の中核病院で看護助手（無資格業務）として働くブラジル人女性１名に、日本人スタッフとのディスコミュニケーションについてインタビューを行った。対象者の勤務する病棟管理者（看護師長）にもインタビューを行った。当該外国人は、無資格者であり、日本に来て初めて看護助手業務についたため、看護助手としての業務内容も、物品の清掃・管理、廃棄物の処理といった業務に限られており、入院患者の車いす搬送など、患者と言語的コミュニケーションが必要な業務はまだ行っていなかった。病棟管理者は、物品の安全で正しい処理や管理の方法など、ブラジル語で記載したマニュアルなどを作成して、できるだけ日本人スタッフとの会話による複雑なやり取りをしないで業務が円滑に遂行できるように対応していた。日常会話の上達や看護助手として長期間病院で働くかどうかを本人が意思決定するかによって、業務内容に対人援助を加えていくという考えを持っていた。

(2)本調査
　経済連携協定（EPA）により来日して、中国地方の山間部都市の介護老人福祉施設で働きながら、2013 年度に介護福祉士資格を取得したインドネシア女性１名、外国人看護師（介護士）受入れ責任者（管理者）、日本人スタッフ（介護職）2 名と半構成的面接を行った。インタビュー内容は、①1 日の勤務形態と仕事の内容、②実際に入所者のケアをする際に、コミュニケーションでこまっていること（困ったこと）はどのようなことか、③日本人の文化で戸惑ったことはどのようなことか、④入所者が話すことが分かるように

なったのは、現在の施設に就職してどのくらい経過してからか、⑤ケアを円滑に実施するために、コミュニケーションはどのような工夫をしているか、⑥ケアに必要な言葉がけ以外に、季節や好きな食べ物、家族、社会の話などどのくらいしているか、⑦日本人スタッフとのコミュニケーションで困っていること（困ったこと）はどのようなことか、⑧実施したことの報告以外に、介護スタッフの一員としてケア方針についての意見や考えを伝えられているかであった。日本人スタッフへのインタビュー内容は、①外国人スタッフが入職してきた当初とまどったことはあったか、②一緒に働くことに対して、メンバーで相手の文化や習慣などについて学習したことはあったか、③入所者やその家族の外国人スタッフへの反応で困ったことはあったか、④③についてどのように対処したか、⑤仕事でどのような役割分担をとっているのか、⑥自分の伝えたいことがうまく伝わらずに悩んだことはどんなときか、⑦排泄介助や入浴介助など、入所者が羞恥心を感じやすいケアは、どのようにして外国人スタッフに入ってもらうようになったか、⑧一緒に働くようになってから、自分の外国人スタッフへの認識で変わったことはあるか、などである。外国人受け入れ管理者に対しては、①対象者の国の風習や宗教についての情報をどのように日本人スタッフに伝えたか、②外国人看護師資格取得候補生が、勤務する上で配慮したことはどのようなことか、③日本人スタッフと外国人看護師資格取得候補生との間でどのような調整的役割をとっているかなどである。

表１　面接者の概要

外国人	年齢	30 代前半
	性別	女性
	出身国	インドネシア
	宗教	イスラム教
	自国での資格	看護師
	日本での資格	介護士
	来日経過年数	3 年
	勤務機関	介護老人福祉施設
	現在の勤務セクション	認知症高齢者が多いフロア
日本人	年齢	20 代１名、30 代１名
	性別	女性
	資格	介護士

結果：面接者の概要を表１に示した。外国人看護師資格取得候補生は、来日後６か月間は、横浜市で日本語等の研修を受けたのち、全国の医療・福祉施設に分散して配属されていた。施設での勤務開始時は、認知症が軽度もしくは、身体介護が必要な高齢者が多くいるフロアで勤務していた。宗教上、頭に頭巾をかぶっていることは、入所高齢者やその家族にとって、外国人スタッフであると認識しやすいという利点があり、拒絶的な反応はみられなかった。外国人介護士は、日本語を正しく聞き取るために、高齢者の話をゆっくり聞く、高齢者が話し始めるのを待つという対応をしていた。インドネシアでは、高齢者はそのほとんどが自宅で介護されて生活しているため、自分の祖父母に接するような態度で介護をしていると語った。食事や清潔、排泄など日常生活ケアについての語彙は限られているため（入所者も、スタッフもその地域の人々で構成されていることから、様々な表現形態での語彙というものは業務用語では存在しないということであった）、介護に用いる日本語については、早期に理解できていた。日本人スタッフは、事前に、管理者から、外国人看護師資格取得候補生の情報を得ており、宗教上の配慮の必要性などについてオリエンテーションを受けていた。介護士資格取得のための受験勉強と仕事を覚えることに努力する姿をみて、自分たちも一層のケア能力向上のための努力の必要性を感じていた。管理者は、施設で外国人が勤務する前から、地元のマスメディアで紹介して、外国人がスタッフとして働き始めたことを地元のテレビ番組で紹介して、施設入所者やその家族以外に地域住民への周知をするという方法をとっていた。宗教的な配慮の必要性と実施については、スタッフに事前に説明・教育を行っていた。また、外国人が最も苦手とする日本語で書くという能力育成よりも、日本語で話すという能力育成を優先・重視していた。そのため、介護記録は、できるだけ必要最低限にして、言語的手段をもって、報告させるようにしていた。施設ケアではあまりたくさんの語彙を必要としないということも、言葉や仕事を覚えるのに役立っていた。介護士資格試験受験勉強についても、同様の方法で勉強するように指導していた。しかし、直接的な介護ケアに必要な言葉以外の高齢者の気持ちや、思いを会話により理解するためには、日常会話に必要な語彙を増やす必要があること、今後看護師資格を取得するためには、多くの専門用語を覚える必要があり、そのリソースを外国人介護士は求めていた。

考察：外国人が働きながら、介護士や看護師資格を取得するのは、現在の合格率をみても難関である。今回介護施設でのディスコミュニケーションについてインタビュー調査したが、管理者の工夫や配慮、日本人スタッフ側の努力によっても、ディスコミュニケーションの状態を回避されていた。しかし、彼らが晴れて資格を取得して、長期間日本で介護士、看護師として勤務することは現在のところあまり期待できていない。他の調査研究においても、外国人が家族と共に日本で長期に生活するためには、職場のコミュニケーション以外に、彼らその家族が暮らすコミュニティでのコミュニケーションが図られないこ

とにより定着していないという報告がなされている。今後はケアの場面の参加観察を行って、コミュニケーションの様相を明らかにしていく必要があると考える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０　件）

〔学会発表〕（計　０　件）

〔図書〕（計０　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０　件）

○取得状況（計　　件）

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
江本　厚子（EMOTO　Atsuko　）
東海大学健康科学部　准教授
研究者番号：70290054

(2)研究分担者
末弘　美樹（SUEHIRO　Miki　）
兵庫県立大学経済学部　教授
研究者番号：50389095